

も見た許りて目が、チヨロ〜する位、とても數

へ切れない位にして、さて申し上ますには

少まづ、空には、丁度此紙面についた孔位の數の星がありましょー、さあ、何方か来て、此孔を御勘定なさい

といつたが、誰も數へて見ようとする者がない、

そこで、殿様は

『では、第三番の問がこうじや、「永久とは何秒間

のことか

少年』ハツ、夫はかようで、こゝから遠い〜所の或國に、金剛石の山がありまして、其高さが一里、幅一里にして深さも一里あります、所が、千年目毎に一羽の鳥が飛んで来て、嘴で以て此山を啄いて居ります、そこで、此山が、其爲めにすつかり啄き崩されて跡なくなつた時が、即永久の

第一秒時が過ぎた時なので……』

殿様は、斜ならず感心して

『ウン、さて〜、お前は聞きしに勝る豪い奴じや、此方の問を三ながら答へたからには、約束通り、今からこの方の子にしてやらうと仰つて、どう〜此少年は殿様の子にして貰いましたとさ。めでたし〜

象のお話 (一)

上野の動物園には、大きな象が、片足を金の鎖でくられて、象小屋の中にじつと縛られて居ます。淺草の花屋敷では、象が、番人の號令に應じて、基盤乗りや、喇叭吹きや、ふ辭儀などします、こんな所を見ますと、形こそ、あんなに無格好に大きいですが何如にも無邪氣で、可愛い、動物であ

りませんか、今から、ちつと許し、象のお話をさせて下さいまし。

象のお家は、どんな所

かと申しますと、まづ、

こんもりと茂つた、深

い森の中で、亞細亞と

亞弗利加とに居ります

る、先づ亞細亞の中で

一番澤山に居る場所は

セイロンといふ美しい

島なので、此島には、

夫はく大きな茂つた

森が澤山ありますて、

國が一體大變に熱い所ですから、大きな木が天

までもといく程も高くつて、夫に木の葉がいやが

上にも茂つて、森の中は晝でも丸で、眞闇です、そして、其中には、何千匹とも知れぬ象が住んで

居ますので、

一體象は、深い森の日

蔭がすきなので、いつ

でも冷しい所、冷しい

所とよつて歩いて居ま

す、そして其處へくる

と、じつと立つて、あ

の大好きな兩耳をバツタ

／＼と動かして、囁

を追つて居ます、時に

は、鼻で以て大きな木

の枝を引きちぎつて、夫を扇にして、あふいで居

るのです。



象は又、水浴が好きなのですから、時に池や河の邊りへ来て、あの鼻を伸ばして水を吸ひ上げては身體中へ吹きかけて居ます。

象の食物は、其森の中に出来る菓物なのです、夫から、若葉とか、柔な木の枝なども食べます、だから、自分の家には、澤山な食物がありますのに、夫で許り満足はしませんで、時々烟へ出て来ては、作物を荒らして困ります。

丁度、米が黄色になり、玉蜀黍がおいしそうに熟すると、夜に入つて象が畠へ荒れ込んで來ます、あんな大きな奴だから壙つたものでない、垣根をぶつ壊す、作物を履み蹠る、そして腹一胚食つて歸つて行くのです、翌朝になつて見ると、畠にはもう何も残つて居ません。

森の中で、象の群の進軍する風が面白い、眞前に

一番年とつた象が進んで、子象とお母さんの象とは、隊の真中の一番安氣な所に置く、そして、皆で以て大層な音=木の枝などを履み折り、履み躡る音=をたて、進んで行きます、もとより象は生れついて音なしの動物ではありますか、こうして、隊を組んで進軍する時には、中々容易なこつて、之を攻撃するなんてことは出来ないです。

亞細亞では象を生捕つて來て、夫を馴らさせて仕事に使ひます、骨では亞弗利加の象も馴らせた事もありまして、戦争の時などは、兵隊が象に乗つて戦つた事などもあります然し今日では、亞弗利加象は、あの象牙が價がします所から、其爲に、狩られて居ります。